

# 男女共修によるダンス授業 に関する研究 (その1)

## —「楽しさ」の因子分析—

東原芳美  
中村なおみ  
川口千代

### I 研究の目的

平成元年、学習指導要領改訂の告示がなされ、中学校の体育分野では、武道およびダンスの領域において男女とも選択し履修できるようになる。従って幅広いダンス学習の可能性が開かれたと考えられるが、中学校期のダンス学習において男女共修や男子の学習という視点での指導実践・研究等があまり検討されてきていない。これまで体育学習指導のなかでは「ホイジンガの文化論的な遊び論やカイヨワの社会学的な遊び論からみた運動の楽しさの検討」や「チクセントミハイの社会心理学的な領域からの運動の楽しさ」が検討されてきた。<sup>2) 5)</sup>

そして学習者の立場から運動の楽しさを捉え、それらの点から運動特性を明らかにした上で、学習内容を再検討することの重要性があげられた。<sup>2) 5) 6)</sup> さらには学習者の内発的動機づけとしての運動の楽しさが、効果的な指導法の手がかりとして取り上げられてきた。<sup>1) 5)</sup>

ダンスの授業においても、個に応じてダンスの特性に触れることができたという経験が、ひいては生涯にわたって自発的にダンスを選択する姿勢につながると思われる。そこで本研究では改訂の内容を既に実践し、検討を行なっている男女共修のダンス授業(ダンス課題学習)を対象にして、学習者の立場からダンスの楽しさを捉え、単元を通してそれがどのように変容しているのかを明らかにし学習内容を検討する。さらに男女間の比較も加え、楽しさの享受にみられる男女の特性を明らかにする。

### II 研究の方法

#### 1. 授業の概要(表1)

本研究で対象とした授業には、ダンス課題学習が設定された。

表1 授業の概要

時間	課題	時間	課題
1	オリエンテーション	6	野生動物1
2	新聞紙の表情をよく見よう	7	野生動物2
3	たいへんだ!	8	野生動物3
4	天気予報は雨	9	静と動/固一離
5	走一跳一転一はうーあ!	10-16	クラス作品づくり

#### 2. 授業の観察・収録の手続き

- (1) 対象: 筑波大学附属中学校1年生 42名  
(男子22名 女子20名)×5クラス
- (2) 期間: 1988年10月~1989年3月
- (3) 場所: 筑波大学附属中学校体育館および育鳳館
- (4) 指導者: 筑波大学附属中学校教諭
- (6) 授業時数: 50分×16時間(週1時間)
- (6) 授業記録: ①授業観察記録②VTR記録
- (7) 学習記録: ①学習個人ノート(毎時)  
②質問紙調査(学習開始前か学習前期・中期・終了後)

#### 3. 授業分析の方法

「学習の成果に着目した分析」<sup>4)</sup>を中心とし、実態把握のため次のような観点を設定し学習開始前(前期)・学習中期・学習終了後の男女の意識の変容過程を分析した。

観点1) 学習課題に対する理解という意味での成果

観点2) ダンスへの接近という意味での成果

観点3) 男女間の理解という意味での成果

特に2)はダンスの好嫌とダンスの楽しさにより分析を行なったが、本研究ではダンスの楽しさという意識の変容を中心に考察をすすめる。

#### 4. 調査の手続き及び統計的処理の方法

ダンスの楽しさについて前年度(1987年度)の自由記述を分類し、その全11カテゴリーについてそれぞれ3項目、計33項目5段階評定から成る質問紙を作成した。それをういて学習前期・中期・終了後の3回にわたって調査を行なった。各調査時期ごとに主因子解法による因子分析を行ない固有値1.00以上の因子を抽出した。0.400以上の因子負荷量を示した項目を用いて因子の解釈を行ない、さらに各因子の因子得点を算出し男女間の比較のためt-検定を行なった。

### III 結果と考察

主因子解法による因子分析を行なった結果、学習前期に7因子、学習中期に7因子、学習終了後において6因子が抽出された。

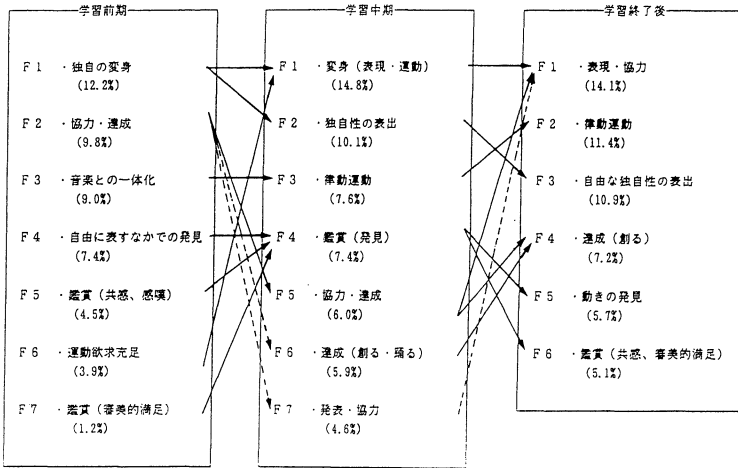
#### 1. 男女間の共通性(表2)

学習前期の段階では、自由のなかの「自己決定」<sup>1)</sup>や精一杯運動することもダンスの楽しさの要因であることが特徴である。

学習中期は、因子が複合化されていることから楽しさが多様に混在していると考えられる。自己とは異なる他者の表現にふれることで、自己の表現の多様化につながる段階、グループ活動というよりも比較的個人が独自のダンス表現を楽しむ過程であると解釈できる。

各課題ごとにひとまとまりのイメージをとら

表2 ダンスの楽しさにおける因子構造の変容



えた動きをつくって見せ合うという学習に基づいた楽しさの変容がみられる。

学習終了後には4～6時間のグループ創作学習に取り組んだ結果に対する楽しさの変容がみられる。

2. 男女間の主な特徴 (図1)

学習前期はF3, F5, F7において0.1%, 0.1%, 1%水準で, 学習中期はF3, F4において0.1%, 5%水準で, 学習終了後はF2, F4, F6において1%, 5%, 1%水準で男子の方が楽しさの因子得点が有意に高い。すなわちダンス単元を通して, リズムによって運動すること, 他者の表現を鑑賞することについては, 男子の方が楽しさの程度が高い。加えて学習終了後には, 作品づくりを達成することについても男子の方が楽しさの程度が高いことが認められた。

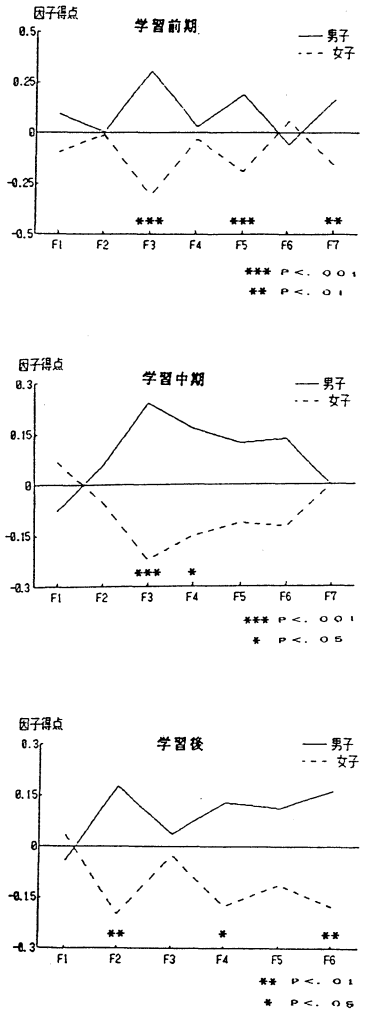


図1 平均因子得点にみられる楽しさの男女比較

IV 結 論

1. 学習過程に伴った楽しさの変容がみられることから, 学習者は個に応じてダンスの特性に触れることができたのではないかと考えられる。中学校期における男女共修によるダンス授業においてダンス課題学習が設定されたことは適切であったといえる。

2. ダンスの楽しさの程度に男女の特徴がみられたことから, ダンス課題学習の指導実践において, 男女の特性を考慮した課題の提示方法, 導入等が望ましいと思われる。広くは個に応じた適切な指導が必要とされよう。

V 今後の課題

ダンスにおける他の授業形態との比較や, 同授業形態で他の指導者による結果等も合わせて検討していく必要があると思われる。

VI 主要参考文献

- 1) 伊藤豊彦・織奥信男(1988): 体育学習における児童・生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識. 体育学研究, 33: 123-33.
- 2) 嘉戸 脩(1988): 運動と楽しさ. (編)宇土正彦「体育科教育法入門」, 大修館書店, pp.40-48.
- 3) 松本千代栄(1985): ダンス表現 学習指導全書. 大修館書店.
- 4) 西 順一(1986): 授業研究を有効にするための研究手続き. 学校体育, 39-9: 29-34.
- 5) 島崎 仁(1990): 運動の特性と楽しさ. (編)松田岩男「新しい体育授業の展開・総説編」, 大修館書店, pp. 115-25.
- 6) 宇土正彦(1986): 体育授業の系譜と展望. 大修館書店, pp. 33-52.